

会話にみられる「重なり」に関する一考察

－ 中間報告 －

本 田 明 子

1. はじめに

共同研究『職場における女性の話しことば』の会話データには、発話の重なる現象が多数見受けられた。その多くは現時点での話し手の発話の最終部分に、次の話し手の話し始めの部分が重なるというものや、相手の発話の先取りといったものだった。こうした現象は、日本語話者が話し手の発話の終了をどのように予測し、自分の話順を得るのか、を知る手がかりになり、日本語の談話進行のシステムの一端を明らかにする役に立つのではないだろうか。また、発話の重なるうち、相手の発話をさえぎって自分の発話を始めるという性質を持つものを割り込み、あるいはさえぎりなどとして取り上げ、その回数等の男女差を比較した研究もある^(注1)。この点では、男女差、あるいは他の属性差、場面差などが、談話の進行にどのように反映するかを解明する手がかりにもなるだろう。

本研究は、自然会話にみられる重なりを手がかりとして、日本語話者の談話進行のシステムを考察し、その男女差、場面差等を明らかにすることを目的としている。本稿では、この研究の中間報告として、データ中にみられる重なるの分類と、個々の事例についての考察を述べることとする。

2. 研究の方法

2.1 資 料

本研究の資料としては、共同研究『職場における女性の話しことば』の会話データ^(注2)で、発話の区切り等の見直しが終了した段階のものを使用した。

2.2 方 法

会話データのなかから、発話の重なりが多くみられるものを選び、重なり
の性質、特徴を分類し、発話者の属性、立場、性質等を考慮して、重なり
が発生した要因を検討する。

2.3 研究の範囲－「重なり」とは

本研究では、ある一時点において、複数の話者が音声を発しているとき、
その時点で発話の「重なり」がおこったという。「重なり」はあくまでも、
複数の話者の発した音声が物理的に重なった現象を示すものとし、質的なも
のは問わない。ただし、発話を目的としない音（拍手、足踏み、衣服のすれ
る音、ものを食べたり、飲んだりする音等）は、発話と同時に発生しても、
重なりとはしない。

この、重なりのうちでも本研究の対象としないものもあるが、その点につ
いては次章の重なりの種類の項で述べる。

3. 重なりの事例

3.1 重なりの種類

『職場における女性の話しことば』の会話データでは、次のような重なり
がみられた。

①現時点の話し手の発話の終末部に、倒置（あるいは付加）部分があらわ
れた場合、次の話し手は発話が完結したものと思い、話し始めることがあ
る。

(1) f 1 ちょっと、いや、ツアーだよね、★結局。

f 2 →あ、じゃあ←、空港からホテルっていうのはなんで、い##。

f 1 ん、空港からもうレンタカー借りて。 [S I] 休憩

（f は、女性の発話者をあらわし、発話順に、1、2…とする。★は次の
話者の重なりが始まった時点を示す。→←内の部分は、相手の発話に重なっ
たことをあらわしている。##は聞き取り不能部分。[S I] は、会話例の
あらわれた資料のインフォーマント名を示す略号、休憩は「朝」、「会議」、
^(注3)

「休憩」という3場面のうち、休憩時間の会話資料であることをあらわす。^(注4)

この例では、f 1の「ツアーだね」で、発話が終了するものと思ったf 2が「あ、じゃあ」といいかけた部分が、f 1が付け加えた「結局」と重なっている。この、f 1とf 2はともに20代の職場の同僚で、会話量も多く、話題も個人的なもので、親しい関係であることがわかる。特にここでの話題はそれぞれが最近行った海外旅行の報告であり、双方の興味が一致して、テンポよく会話が進んでいる。

②話し手の言おうとすることがわかって、同時に言ってしまう場合（発話の先取り）。

(2) f 1 もう到着のロビーと出発のロビーはもう階数★わかれてるし。

f 2 →別々。← [S I] 休憩

これらも、(1)と同じ二人の話者の会話であるが、①とは違い、f 1の発話が終了しないことは明らかであるのに、f 1の発話を予想して、f 2が発話している。この二人の会話には、①②のようなタイプの重なりが多く、互いに協力しながら会話を作り上げている「協調型」談話進行の例であるといえるだろう。これに対し、次にあげる事例は、発話の先取りが失敗した例である。

(3) f 1 えーと、どちらでもいいんですが、たぶん、えー、＜笑いながら＞写真のほうが先にそろってゆうことは、★往々にしてあるんです。

m 2 →あ、ないですねえ。←

m 2 あるんですか。＜笑い＞

f 1 ええ。＜笑い＞ [H O] 会議

(mは男性の発話者。)

このf 1とm 2は、初対面で、仕事上の打ち合わせをしているところである。f 1は30代、m 2は40代であるが、f 1はm 2に対し、雑誌印刷の仕事を発注する立場にあり、その仕事の流れを確認している場面である。この発話は写真原稿と文字原稿のどちらかが先にできた場合どうするかを話しているなかにあらわれたものだが、この発話以前にm 2は一般的に写真より文字のほうが先にできる場面が多いという予想を立てて、その流れで話を進めて

おり、例にあげた f 1 の発話も前半は m 2 の発話を受ける口調で進めながら、話題になっている雑誌の場合は、文字より写真のほうが早いことが多いという、m 2 の予想とは逆の事実を述べている。そのため、m 2 は f 1 の発話の先取りに失敗し、「あるんですか」と言い直して、笑っているが、この笑いは先取りの失敗を取り戻す働きを持っているのだろう。この事例から、発話の先取りには会話者同士の話題についての共通の知識や理解、また、場合によっては発話者の話癖などの理解も必要であると考えられる。逆にいえば、ある程度の相互理解がないと、発話の先取りはおこりにくいという仮説が立てられるのではないだろうか。

③話し手の働きかけ（質問等）に対して、相手の反応が遅れ、話し手がことばを続けた場合。

(4) f 1 え、けど、ツアーで行ったんですよね↑

f 1 あの一、★飛行機と一。

f 2 →ううん。← [S I] 休憩

(↑は語尾の上昇調を示す。)

この例も、(1)(2)と同じ二人の話者の同じ流れのなかの発話である。休憩時の食事をしながらの会話であるため、f 1 の質問に対して f 2 の応答が遅れ、f 1 が「あの一」と発話を続けたところに f 2 の応答が重なっている。これは、(1)(2)の例にみられるように、テンポよく発話が続いてきたために、今までの流れに反する f 2 の反応の遅れに、f 1 がいち早く反応した結果おこった重なりであるといえるかもしれない。

④話し手の発話の途中で、言いたいことができたために、発話の終了を待たずに言ってしまう場合。また、話し手の働きかけ（質問等）に対して、反応が早すぎる場合。

(5) m 1 あの一、なんだい、材料費いくらくらで、誰が★なにを。

f 2 →ここ。←

m 1 そうゆう感じで。

f 2 ここにある。 [HO] 朝

これは会社員である f 2 (30代) が、社長の m 1 (40代) に、経費の報告

書の書き方を尋ねている場面にあらわれた発話である。m 1 の説明の途中で、その点はすでに書いてあると言いたくなった f 2 の発話が、m 1 の発話に重なっている。この f 2 の重なりは、強い者が弱い者の発話に重なるという従来の考え方からいけば逆の現象であり、興味深い。こうした 2 者間の会話については、今後くわしく分析していきたいと思う。

⑤複数の話者が同時に話し始めた場合。

(6) m 1 それ正式名称なんてゆうの↑

f 2 ★○○○○。(固有名詞)

f 3 →○○○○(固有名詞)←じゃないの。<笑い・複>

f 3 ○○○○(固有名詞)しか書いてない。 [SK] 休憩

この例では、m 1 の問いかけに対して f 2 と f 3 が同時に応答したため、発話の重なりがおこっている。こういうケースの他にも、間や沈黙のあと、二人が同時に発話を始めるという例も多い。こうした同時発話については、従来のわりこみやさえぎりの研究では、考察の対象外とされてきたが、同時発話の直後にどちらが発話を続ける権利をとるかによって、会話の参加者間の関係や話題に対する態度を知ることができるのではないかと思われ、本研究ではこうした例についても考察の対象としていきたい。

⑥話し手の発話が長く、終了を待ちかねたように相手が話し始める場合。

(7) f 1 あの、ほら、ちらしの、あの、今までやってなかったけれど、
(うん、うん) なんか、館内用だとか、(ええ、ええ、ええ)
なんとか用だとか、こまこまこまこまなんか(そうそうそう)、
作ってあって、ほんとに帯に短し、たすきに長しってゆうもの
だから、今回のデータブックにしてもやっぱり、ちょっと、
うーん、あの、もったいないつくりかた★ですね。

f 2 →全体の←規模としては小さいんですか↑ [MI] 会議

これは f 1 (30代) と f 2 (40代)、さらにもう一人の男性を加えた三者での仕事の打ち合わせのなかの会話である。f 1 は、f 2 に対して仕事を発注するという立場にある。この会話資料には、重なりのなかでも④⑤⑥のタイプが多くあらわれている。重なりの④⑥というタイプは、とにかく自分の

言いたいことをいおうという意識が強くみられるものであり、このタイプが多い発話は、話者同士が協力しあって会話を作り上げていくのとは異なり、「自己主張型」の談話進行といえるのではないだろうか。

⑦「ああ、」、「そう」、「うん」等の短いあいづちと発話が重なる場合。

事例(7)の(うん、うん)など、かっこ内はf 2のあいづちを示している。あいづちは、話し手の発話の合間に聞き手がおこなうものであり、ある程度重なるのは当然ともいえ、会話における重なりの中なかではもっとも頻度が高いものだろう。しかし、はじめから重なることがある程度予想され、許容されうるという点で、他の重なりとは性質を異にしており、ここでは考察の対象とはしない。

⑧ 4人以上の参加者による会話の中なかで、複数のグループに分かれて会話が行進するとき、異なるグループの発話が同時に起こった場合。

これも、音声の物理的な重なりという点では「重なり」の一種であるといえるかもしれないが、重なり合った相互の発話は同じ談話の流れの中なかでなされたものではなく、関連性をもたないので、研究の対象とはしない。

3.2 重なりに対する反応

自然な会話の中なかでは、以上のようなさまざまな場面で発話の重なりがおこるが、次に重なられた側の反応についても考えてみたい。

重なられた話者の反応は、大きくみると、2つに分けることができる。すなわち、重なられても、そのまま発話続ける場合と、重なられて発話を中断してしまう場合である。前述の事例でみると、(2)は前者に近く、(4)(5)は後者に近いといえそうだ。さらにもう少し詳しくわしくみると、重なられても話を続ける場合にも2つのタイプがあるようだ。

ひとつは、(8)の事例のように重なった発話を見殺しして話を続けるものである。

- (8) f 1 福岡のセンターなんてまあ女性が★多いけどー、男はみんなぶっ倒れてんのにー<笑い・複>女の人みんな朝まで飲んでるの。<笑い・複>

f 2 →みんな焼酎飲むもんねー。← [SK] 休憩

f 1、f 2 はともに30代の職場の同僚で、日頃の会話量も多く、親しい間柄である。九州の女性は強いという会話の流れのなかで、九州の女性のお酒の強さが話題になり、f 1 が自分の体験した例を話している途中で、f 2 が「焼酎を飲む」という話題で重なってくるが、f 1 はそれには触れず、自分の発話を続けている。

そして、もうひとつは、重なられても発話を続けていながら、重なった発話に対して応答をおこなっているもので、次のような事例がある。

- (9) f 1 海は行ってないけどさー、すごいなんか、蚊ってゆうの↑、海むしてってゆうの、すーごいいっぱいいて、あと3ヵ所ぐらい刺されてさー、★#####、そうなんか膿がでてくるっていわれたのね。

f 2 →あー、またこーんなんなっちゃうんだよ。← [OK] 朝

この場合、f 1 の発話の途中で、f 2 の「またこんなになっちゃうんだよ。」という発話が重なっているが、f 1 は発話をやめず、(なんと言ったかは聞き取り不能だが)、f 2 の(重なった)発話が終わったところで、「そう」とf 2 に対して、応答している。このf 1、f 2 も職場の親しい同僚で、ともに20代である。この(8)(9)の事例は、どちらも親しい同年代の同性同士の会話である。異なるのは、前者は二人だけの会話ではなく、他にも参加者がいるのに対して、後者は、この部分については二人だけの会話である点であった。

また、重なられて話をやめる場合にも2つの場合がみられる。ひとつは重なられて完全に自分のいおうとした話を断念してしまう場合、そして、もうひとつは重なった相手の発話が終わるのを待って、自分の言いたかったことを続ける場合である。後者の事例には(10)のような場合がある。

- (10) f 1 お客様からで○○○○(固有名詞)の××××(固有名詞)先生の△△△△(固有名詞)ってゆうのありますよね。

f 1 あれ★が。<いいさし>

f 2 →今月、←今月がないって。

f 1 それを参考文献として手に入れたいので、たとえばなんか。

[OR] 休憩

この事例では、f 1は重なられて発話をやめていながら、f 2の「今月がないって」という問いかけには直接応答せず、自分が言いかけてやめたことを続けている。

このように重なられた側の反応にも、「協調型」と「自己主張型」があるようだ。(9)は重なられても、自分の話を続けているが、相手の発話も聞いて応答を返しているという点で「協調型」、(8)は重なりにかまわず、自分の話を続ける「自己主張型」、(10)はいったんことばをきいていながら、相手の問いかけは無視するという点である種の「自己主張型」といえるのではないだろうか。

4. 今後の課題

以上みてきたように、重なりの現象にもいくつかのタイプがある。本稿では、仮に、「協調型」の談話進行、「自己主張型」の談話進行ということばをもちいたが、それぞれのタイプの重なりの頻度によって、談話進行のタイプを分類することができそうである。

今後は、発話の重なりという観点からみた談話進行のタイプについてさらに考察を深めるとともに、会話の参加者の関係、属性、場面によって、どのようなタイプの重なりがうまれやすいかという点も考察していきたい。それをもとに、会話の参加者の関係、属性、場面等により、どのようなタイプの談話進行がおこりやすいかといった予測も、あるいは可能になるのではないだろうか。また、本稿では触れることができなかったが、重なりの起きやすい位置、形態などから、発話終了の予測をどのようにおこなっているのかという点の考察もおこなってきたい。

注

- 1 江原他（1993）など。
- 2 データの総数、インフォーマントについては『ことば』15号、pp. 112～113参照のこと。
- 3 『ことば』16号参照。
- 4 会話資料収集のくわしい方法等については現代日本語研究会（1994）『職場における女性の話しことば－自然談話録音資料に基づいて－』または『ことば』15号を参照のこと。

参考文献

江原由美子・好井裕明・山崎敬一（1993）「性差別のエスノメソドロジー」
れいのるず＝秋葉かつえ編『おんなと日本語』有信堂